

せりと云ふ。

結 論

各國か如何なる保護政策を行へりやと云ふ問題よりも、各國は果して保護政策を執れりやと云ふか第一に決定すべき問題なり。

人或は鐵の如き需要の大なるものは宜しく國內に於て生産するを可とす、從て保護政策を執れる國に於ては必ず保護を加へつゝあるものとなすものあれとも、之れ盲斷なり、需要の大なると保護の必要なるとは自ら別問題なり、否却て需要の大なるか爲の保護は危険なり、何となれば少數の製造業者の利益の爲に多數國民の負擔を増加するの虞あればなり、苟も之を保護する以上は消費者の利益を犠牲とすることは豫め覺悟せざる可からず、問題は唯將來の發達か現在の犠牲を填補して餘ありや否やの點にあり、換言すれば鐵の工業の未だ發達せざる國にありて然も生産條件か將來の進歩を豫想せしむるに十分なる場合にありて保護は始て有效たるを得るなり。

然るに此點に就て歐羅巴の諸國は之を概言すれば既に保護政策の時代を經過せるものと云ふへし(伊、露、瑞等を除く)吾人の觀る處を以てすれば鐵工業に對し國家か特別顯著なる保護を加へつゝあるものなし、鐵鑛輸出關稅說の如き屢々高唱され又屢々實施されたる處なるも歐羅巴の大陸中之を現に有効に實施せるものあるを聞かず。

今や保護政策隆盛の時代なり、從て獨り鐵に對してのみ保護なきは其權衡上不當なり、蓋し堅固なる保護國稅の堤防か此一穴よりして決壊するの虞なきを保せず、況んや四圍皆保護稅あるに我獨り自由主義を固執するか如きことあれば内國工業を萎微せしめ、延ひて國民全般の不利となることなきを得ざるに於てをや。

尙製鐵事業保護の可否は獨り經濟上の事情のみによりて決定さる可きに非ず、即ち別に軍事的國

家存立目的の存するあるを閉却す可らず、即ち鐵材は武器の第一原料なり、即ち武器の獨立なる一點に於て製鐵事業の保護論は千斤の重きをなす。

吾人は這回の大戦か如何に終結す可きやを知らず、然れとも其終局の如何に關せず、此苦き實物教育は永く彼等の腦裏に深酷に刻みつけられたるへきは想像に難からず、閉鎖主義、經濟獨立主義か極端に主張さるゝに至る可し、此經濟獨立主義の影響を受く可き産業の内、鐵の如き恐らく其重なるものなる可し。

然れとも茲に注意す可きは極端なる開放主義、自由主義の誤なるか如く、極端なる保護主義、閉鎖主義も亦誤なり、保護の條件備らずして保護をなすか如きは國帑を費す處徒に多くして其效果の何等之に添ふ處なきものなり、鐵の如き需要の廣汎なるものに於て殊に然り、唯本邦は歐米諸先進國と異り、鐵産國として其發達極めて幼稚なるか故に將來の發展にして期待し得へくんは、之を保護するも其程度たに當を失せずんはタンピングの弊を生するか如きことなかるへし。(終)